

第17回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



小学生の部 優秀賞 受賞作品

『ぼくはわが家のコンポスター』

長崎県

佐世保市立大野小学校

三年 新谷 諒

ぼくはわが家のコンポスター

佐世保市立大野小学校

三年

新谷 諒（しんたに りょう）

ぼくが小さいころ、ぼくが食べきれないごはんを、おばあちゃんが食べてくれました。でも今は、おばあちゃんが食べきれないごはんを、ぼくが食べています。

そんなぼくを見ながら、

「諒は、コンポスターみたいだね」

と、お母さんが言いました。

「コンポスターって何？」

とぼくが聞くと、

「ゴミをひりょうにしてくれるきかいのことよ」と教えてくれました。

レストランで食べきれなかった食べ物や、お店で売れなかった食べ物は「ゴミになり、そのりょうはものすごく多いのだとお母さんが言いました。日本だけでも、ひとりひとりが毎日おにぎりを一こずべていることになるそうです。その「ずべている食べ物」で、世界中のおなかをすかせている人たちを助けることができるのだという話を、はじめて知りました。「おばあちゃんが食べきれないものは、ふつうはゴミになってしまっけど、わが家には「コンポスターがいるから助かるね」

とお母さんがうれしそうに言いました。

でも、ぼくは、「ぼくは「コンポスターじゃない」と思いました。おばあちゃんが食べきれないものを食べることはできても、ひりょうを作ることにはできないからです。

ひりょうは大切なものです。

家の小さな畑で育てている野さいは、ひりょうをあげたら大きく育ちます。

プランターにさいている花は、ひりょうをあげると長生きします。

そんなふうには、ひりょうは、野さいや花を元気にしてくれます。

でもぼくは、ひりょうを作ることにはできません。

ぼくがそう言っていると、お母さんがわらって、

「諒は毎日「コンポ」わらって、お母さんたちをしあわせな気持ちにしてくれているでしょう。諒のえがおは、お母さんたちの心のひりょうなのよ」

と言いました。ぼくは、ぼくがお母さんたちの「ひりょう」になっているという話を聞いて、とてもうれしくなりました。

ぼくは、わが家のコンポスターです。

これからたくさん食べて、たくさんわらって、家ぞくのひりょうになりたいと思います。